

聖霊降臨祭を迎えて目の前の世界が緑と青色に輝き、清々しい気分ですが、その割に温度が上がらず、「これから秋？」なんて思う日々が続いています。きっと6月に入ったら一気に暖かくなることでしょう。

会堂での礼拝は、これまで第一・三日曜日のみでしたが、6月からは毎週となります。Skypeはこれからも同時配信で繋げて参ります。また、私たちがお借りしているドイツ州・ボンヘッファー教会との交わりも再開し、先日は合同礼拝の後、「聖書の食事」(愛餐会のようなもの)を楽しみました。礼拝の中では四人の子どもたちが洗礼を受け、ご両親や関係する方々は涙をぬぐっておられ、こちら胸が熱くなりました。特に陸続きで激化しているロシア・ウクライナの戦争を目の当たりにしている子どもたちがこの世に絶望するのではなく、主にある希望を見続けて欲しいと心から願うものです。

日本から戻ってきてすぐに外部の説教の奉仕が重なり、私の限界を優に超えたものでしたが、何とか守られたことを感謝しています。支える会からご連絡があったと思いますが、5月19日には、サグラダファミリア教会の地下聖堂で、普段は立ち入り禁止の講壇で御言葉の執り継ぎをさせて頂きました。「バルセロナ日本語で聖書を読む会」という、牧者が常駐しない集会があります。その為に毎月牧師が交代で御言葉を語っています。通常は信徒のお宅で行われていますが、今回は日本からの取材があったことから会堂をお借りすることになりました。メンバーの方(日本人)がサグラダファミリア教会の奏楽者である関係から貸し切りで特別に許可がおりています。因みにお借りしたのは今回で三度目のことです。日本人が海外で信頼されて活躍していることは、同じ日本人として誇り高く思いました。

但しカトリックの教会で、プロテスタントの牧師が講壇で説教することは絶対に許されないことなので、形式は礼拝でしたが表向きは聖書のお話を聞く、ということでした。かの地ではカトリックが主流でプロテスタントは「新興宗教か悪魔」とまで言われるようで、認識不足の私には驚き以外の何ものでもありませんでした。その辺も勉強になり、様々な面でスペインは私にとって新鮮な場となりました。ケルンから飛行機の直行便で二時間弱の距離で、同じEU内なので入国審査もなく、感覚的には東京から沖縄のようです。しかし、お国が変わるとプロテスタントの捉え方がこんなにも違うのだと痛感しました。

このように欧州では牧者がいない集会や教会が多くありますが、其々が福音を真剣に求めています。囲いの中からはみ出ない小羊たちであるようにお祈り頂けると幸いです。

ホームページにはドイツの様子わかる写真も掲載しています。過去のメールマガジンも見やすくなりましたので、是非ご覧ください。<http://www.komatsugawa-ch.com/PfarrerIn-Ryokosasaki/mailmagazine.html>



海の近くにあるサンタ・マリア・ダルマル教会
船乗りたちによって造られた教会です。航海の安全と当時の疫病から守られるようにと願って建てられた教会です。正面入り口には、お金がない人々は石を運んで建築に加わったという彫刻が記されています。

サグラダファミリア教会の究極を求める教会と対照的に実に生活に根付いた教会だな〜と、しみじみと見入りました。



ガウデイのお墓

集会の後、皆様と

